
CLANNAD 東京編 ~

亜李子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CLANNAD 東京編

【Nコード】

N7481G

【作者名】

亜李子

【あらすじ】

岡崎汐が高校生になったお話。第一話、二話はまったく高校生がけんけいしないんですがその後の展開で汐がメインになっていくストーリー。CLANNADを見たことのない人はちょっとわかりずらいかもしれませんができるだけわかるよう努力します今後の展開を楽しみにしつつ読んでください

東京見学1

「いってきまーす。ママ」

「気をつけて学校にいくんですよ、汐ちゃーん」

「あゝもう学校にいったのか、汐のやつ」

「智也君が起きるのが遅いんです」

渚は少し怒った口調に俺に言う。いつものように起き渚が作る朝ごはんを汐と三人で食べ汐と一緒に渚に見送られながら会社に行く。このごく平凡の生活が俺の望みだったのかもしれない。汐は俺と渚が通っていた光坂高校に通う2年。とても健康的で生まれてこのかた風邪というものをひいたことがない。成績はそこそこで運動神経も抜群で学年では1、2位をあらそうほどの美少女に成長した。泣き虫でがんばりやさんなのが渚ににたのだろう。そんなこんなで俺はとても充実した日々をすごしていた。

「渚、汐。ちよつといいか？」

「なに、パパ」

「なんですか。あなた」

「来週の土曜に家族で東京に旅行にいかないか？土、日と泊まりで。」

「本当！パパ。嬉しい」

「まゝ家族で旅行なんて去年の夏以来ですな」

俺はとても満足している。汐と渚の笑顔が見れるだけで俺は本当に幸せだった。

「よーし！じゃあ決定だな。じゃ、来週の土曜日、家族で旅行だー」

「おー」

汐も渚も本当に嬉しそうだ。

「でも、あなた。どうして急に東京に旅行なさるんですか」

「あゝ、春原から先週電話があったんだ。今度の土曜日東京に来て。東京を案内してやるからさってね」

「春原さんですか。それはとても楽しみです。でしたらお父さんもお母さんも誘いまししょうか」

「おっさんたちをか？」

「え、あつきーもくるの。ぜひ呼ぼうよ。あつきーとも旅行したいしさなえさんとも話したいしね、いいでしょう。パパ」

「しゃーないな。さなえさんたちもよぶか。な、汐」

「うん」

汐は大きくうなずいてとてもよろこんだ。

そして土曜日。

「よー智也。元気そうにしてるじゃねーか。それに渚も汐も」

「おっさん、酒くせーよ。なに朝っぱらから酒飲んでんだよ」

「うるせー、朝から酒飲んで何が悪い。けっ、東京につくまで寝るからな。絶対起こすんじゃねーぞ。いいな」

「だれもおこさねーよこんなさけくせーやつを」

「みなさん、東京まで時間がありますのでうちで焼いたパンをたべませんか」

「さなえさん、俺も寝ます」

口に出しらずにいけどさなえさんのつくるパンはなにかしらとまずい。だが、あれをいつも食ってるおっさんをたきにすげーこのひとと懇親してしまうときがある。

まもなく〜東京、東京です。お忘れ物がないよ
うになさいませ。まもなく列車東京に着きます。

「やっと東京か。たしか春原が待っているのはっ」と

そうやって春原を探していると遠くから俺を呼ぶ声がきこえた。春原だ。

「おゝい。岡崎くこつちだよー」

「おゝ春原。久しぶり。元気にやってたか」

「おうよ。そういうおまえこそ、渚ちゃんといつもラブラブなんですか。この幸せ者」

春原はいつものように俺にちよっこいをかける

「ん？あの美少女はもしかすると汐ちゃんですか！めちやくちゃ可愛いじゃないですか、渚ちゃんによく似てる」

「いつとくが汐に変なことしたらただじゃすまないぞ。もし汐にあやまちなことをさせたらお前、一瞬にしてこの世を去ることになるぞ」

「おゝ怖っわ、大丈夫だよ。汐ちゃんにはなにもしないよ。第一、俺には愛する俺の

マイハニーがいるし」

そついま春原が言ったとおり春原は2年前に結婚しているそれに春原にはもつたいたいほどのかわいらしい子供もいる。

「で、東京見学はいついくんだ春原」

「はいはい。ちゃんとわかってますよではいまから東京見学といきますかー」

そして俺らは春原のいくところをつかれはてるまでつれまわした。

「おい、春原。もうやめにしないかもう夜の11時だぞ」

「まだまだ、いくところがいっぱいあるぜー」

「明日にしないかもうくたただ」

「そうですね。お肌にもよくたくないですしもう帰りましょう。春原さん、今日はいろいろ楽しかったです」

「渚ちゃんがいうなら・・・」

そして俺らと春原は別れ明日東京見学2回目スタートさせる。

東京見学1（後書き）

どうもです。自分ブランドセフトオートの小説をかいてまーす。できれば読んでくださいな

東京見学2（前書き）

いよいよ、東京見学終盤、さて東京見学はどうなるのか

東京見学2

次の朝：

「おっはよー岡崎」

「朝からハイテンションだな春原は」

「だって、今日こそが東京見学の一番いいところをおしえるんだからさ」

そういつて、春原は俺たちを誘導した。まずはじめに浅草、雷門にいき、次にお台場、そしてどんどんと見物していった。そして最後に行く場所は

「おい、なぜ秋葉原なんだ。春原」

「ふふふ、なぜって、それはもちろん、渚ちゃんと汐ちゃんとさなえさんのメイド姿をみるためなのだ」

「おいてえめーなに俺の奥さんのメイド姿が見てんだよ。自分の奥さんにやってもらえばいいじゃないか。それに汐もまきこむな」

「だってよー岡崎ー俺も一回マイ、ハニーにたのんだんだよ。だけど、この変態とかいわれてでてっただよ」

「おまえ、悲しいな」

「でもメイド服って可愛いじゃん。私着てもいいよ！」

「汐、いいのか？春原の変態目線にたえられるか？」

「おい！岡崎、俺はそこまで変態じゃないぞ」

「どうだか」

そしてさなえさんも渚もメイド服を着て秋葉原の町をあるくこととなった。

「おい」

まわりの目線にたえられなかった。渚と汐とさなえさんをシャ目とするものもいたり、まわりは一気に気持ち悪い男たちにかこまれた。「ちょっと恥かしいかも」

「そうですね、汐ちゃん、絶対にはなれないでくださいね。はぐれ

たら大変です」

「わかってるよママ」

「渚も立派なお母さんになりましたね」

そうこういつてるばあいには俺たちはあの気持ち悪い集団からぬけだした。

ちよつとまで

「汐がない!」

「え…まさか、嘘でしょ?」

汐だけはぐれてしまったのだろうか。と、そのとき、遠くから助けを求める声がきこえた。

汐だ。

「パパ、あっきー、みんなー助けて〜」

「汐ーいまいくからまってる」

俺たちはそういい、汐をのせた誘拐犯の車を追った。

東京見学2（後書き）

どうでしょうか。この小説とともにグランドセフトオートもよんで
いただけましたか？

とても楽しい作品になってますのでこの小説とともにぜひ読んでく
ださいね

悪い夢（前書き）

特にはありません

悪い夢

俺はまた、悪い夢でもみているんだろうか。なぜ悪い夢からさめないんだ。俺に苦痛しか与えない夢をなぜみせられつづけるんだろうか。

「あ、夢だったのか」

「パパはやくおきて」

この声は汐、やはり夢だった。気がつくとも新幹線の中にいた。

「智也さん、すごいなされてましたよ」

「大丈夫ですか、あなた」

「けっ、心配かけさせやがって智也」

そこにはおっさんやさなえさん、渚に汐の笑顔があった。いまさっきのが現実だとおもうと俺はいつたいなにをしていたんだろうか。それがもし本当のことならばたぶん俺はそこにたおれこんでいたかもしれない。

「パパ、もうすぐつくよ。私たちの町に」

「そうだな。汐」

そして…俺たちの帰る場所へと帰っていった。

「おっさん、なぜ俺たちをよんだ？」

「わたしはうれしいです。お父さんに会うことは」

「くーさすがお父さんおもしろいいい娘だぜ」

「で、おっさん、話ってなんだ」

「おおそうだったそうだった、話って言うのはだな俺たちパン屋をやめることにしましたー」

…

「えー……」

「おい！おっさんどういうことだ。店たたんじまったらどうやって生活するんだよ」

「そうですね、わたし、お母さんのつくるパンが大好きです。店をやめるなんていわないでください」

「そのことはさなえさんもしつてのことか」

「当然だ」

突然のことだった。でもまあ店をたたむだけでおっさんやさなえさんがいなくなることもないし、パンがたべたかつたらさなえさんにいえばいいことなだけであるから俺は別にいいんじゃないかとおっさんにいった。渚も俺の説得によりなんとか了承をえた。

しかし

いつまでも幸せにはいられないのだ。

悪い夢（後書き）

どうでしょうか。今後展開がきにはなりませんか。
今後とも自分をよろしくおねがいます

喜ばしい知らせ(前書き)

特にはありません。

喜ばしい知らせ

光坂電気

「岡崎君、ちよつといいかね」

親方が俺を呼んだ。

「何でしょうか」

「君に転勤のはなしがきているぞ」

それはとてもよるこばしいことだった。前もそんなことがあつたが、親父のせいだめになつていらいなにもいいはなしがなかつたがやつと俺にもてんきがきた。

「で、転勤先はどこなんですか？」

「東京だよ」

転勤先はこのまえ旅行した東京であつた。しかし渚や汐はいいと言うだろうか。それに転勤するとなるとオツサンや早苗さんにもなかなかあえなくなつてしまふ。それに汐が悲しむであろう。せつかく友達とも仲良くあそんでいたのに、知らない場所でちゃんと生活できるのであるうか。だが、家族を十分にやしなえるほどの給料も出る。まあ自分ひとりで考えるよりも家族みんなで考えよう。俺はそう、思った。

そして家えと帰つてきた。

「おかえりなさい朋也君」

「おかえりー、パパ」

渚と汐がいつものようにでむかえてくれた。

「ただいま、渚、汐」

「夕ご飯できてるので一緒に食べましょう」

そして俺らは三人で渚の作る飯を食べた。そして俺はいおうとしていたことをきりだした

「渚、汐はなしがある」

「なんでしよう、朋也君」

「実は…東京に転勤することになったんだ。だから頼む、OKしてくれるか」

渚は少し真剣な顔で俺の話をきいていた。そして表情をゆるめるとにつこりして

「おめでとうございます朋也君」

「あめでとー、パパ」

あれ？おもっていたより素直だった。俺は絶対、反対されると思っていたがいがいとうまくいった。

「いいのか、本当に。知らない場所にいくんだぞ。それに汐だって友達と離れるのはいやだろ？」

「パパ、平気だよ。新しい場所でも、またすぐ友達つくるし、私は友達よりもパパのことが好きだから」

「そうですよ、朋也君。私も朋也君のいくところなら知らない場所でもかまいません。それにお母さんやお父さんにも私からいっておくので安心してください」

俺は渚と汐の優しさに少し感動してしまった。

「じゃあ転勤日は来週の日曜だ。それまでに用意をしといてくれ、あと俺からオッサンや早苗さんに転勤することを話しておくよ」
そういつて、俺は寝た。

次の日…

「なあにー！ー！ー！。東京に転勤だと、てえめー。めでてえじやねーか」

「おめでとうございます。朋也さん」

オッサンや早苗さんも喜んで俺の転勤をみとめてくれた。

「転勤日にはかならず見送りにいきますね」

「ありがとうございます。早苗さんそれにオッサン」

オッサンはすこし、引きつった顔で笑った。

そして、転勤の日。

「じゃあ行つてきます。あっ、早苗さん」

「いつてきますね、お父さん、お母さん」

「気をつけていつてくるんですよ」

「おい！たまには手紙送れよ」

「わかつてるよ、オッサン。じゃあ、みんないつてきます」

そして、俺たちの新たなスタートが始まっていく

喜ばしい知らせ（後書き）

みなさん。本当に僕の作品を読んでいただきありがとうございます。まだまだいたらないとこだけですから少しづつかいぜんしていきますので皆様の応援をお願いします。今後ともよろしくお願いします

新スタート（前書き）

特にはありません

新スタート

東京

「やっと着いたか」

その日はやけに眠たくなるような陽気に照らされていた。心地よい風が吹き、いかにも俺たち家族の新しいスタートをむかえるかのようだった。

俺の転勤先は東京では結構、有名な電気会社だった。ここ最近ではアメリカからの支持をつけているほどの会社だ。俺は明日からこのでっかい会社に働くとおもつといまにも胸がドキドキしてきた。そして俺たちの家は親方が手配してくれた。

「ここが新しい家だぞ！渚、汐」

「でっかい。前の家とはくらべものになんないね。パパ」

「そうですね。でもこんなに大きいとお掃除が大変そうですね」

たしかに、渚が困り果てるのも無理はない。なぜなら本当にお屋敷ぐらいの広い面積があるのだから。しかしなぜ親方はこんな、お屋敷を手配したのだろうか。普通のアパートかマンションでよかったのに。そうおもいつつ屋敷にはいった。

屋敷の中はけっこう、真新しかった。家具もほんとに未使用じゃないか疑うくらいきれいだった。

「パパ、すごいねこのお屋敷！」

「そうですね。とてもきれいです。朋也君」

渚も汐もうれしそうでした。部屋は渚と俺の寝室と汐の一人部屋。そして屋敷の地下は俺の書斎部屋とした。

明日からが本番だ。俺たち家族の新スタート。いろいろと不安はある。しかし俺たち、岡崎家ならのりこえていける。どんなことがあろうとも。

次の日…

汐が通う学校、「青柳坂高等学校」東京ではそこそこの名門校である。

汐は今日からこの学校に通うのだ。

新スタート（後書き）

日に日にアクセス数が増えてきてとても嬉しいですが、これからもがんばっていきますのでよろしくです。

ファースト スクール(前書き)

これから、汐がメインになっていくのでよろです

ファースト スクール

青柳坂高等学校

「汐ちゃん。大丈夫よりリラックスして」

先生が私に優しく声をかけてくれた。

「はい。先生、ありがとうございます。おかげで勇気がわいてきました」

「そのいきよ、汐ちゃん」

先生の名前は吉澤 梨恵子先生。教師暦5年のベテランだ。とてもやさしく、生徒にたいしてとても熱血な先生だ。

そして今日から私のクラス2 - Aのドアをひいた。

「はい。みなさんおはようございます。今日は皆さんに新しい転校生がやってきました。じゃあ汐ちゃん、ファイト！」

私は深呼吸して声をだした。

「みなさん、はじめまして。岡崎 汐といいます。なれない東京での生活なんです。みなさんと一人でも多く友達をつくりたいのでこれから、よろしく願います」

私の心のなかでは成功したと自己満足した。

「じゃあ汐ちゃんの席はつと…窓側の一番後ろの席ね」

「はい」

そして私の席の隣は男のだった。

「よろしくね！えーと、名前なに？」

「秋元 零次だけど」

その男の子は学校では浮いた存在らしい。昔のパパにそっくり、とおもいつつ授業をうけた。

放課後

私はすぐに友達ができた。一人はとても頭がいいがどじっこの、紗江原 由紀ちゃん。

そしてもう一人はとても活発で元気がいい、園崎 美鳩ちゃん。

私はこれから、学校が楽しくなりそうだと私は思った。

私もパパとママのように、運命的な出来事はおきないだろうか、少し期待しつつもあった。

これからが本番だ。私の運命はいつたいたいのようになるのか。

ファースト スクール（後書き）

どうもです。いつも読んでくれてありがとう。

皆さんにお願いがあるんですが（東京に住んでる人限定）で東京の楽しい場所とかあったら僕に教えてくれませんか？これからのストーリーにやくだてさせたいのでお願いします

最悪な出会い（前書き）

特にありません。

最悪な出会い

「あれ・・・これは夢？」

私はいつのまにか夢をみていた。そこは一面、真っ白な風景でそれ以外なにもない世界。

私は小さいとき、この夢に覚えがあるんだがぜんぜん、おぼえてはいない。

「いつたいこの世界はなに？」

私はそういつつ、あたりを歩き回った。

すると、ガラクタのロボットがたっていた。そのロボットは手を私にのばし・・・

「あれ・・・」

いつのまにか夢はさめていた。目覚まし時計をみると、遅刻寸前だった。

「やっばー！」

慌てて制服に着替え階段を駆け下りた。

「ママ、どうして起こしてくれなかったのー！」

「ちゃんと起こしにいきましたけど、汐ちゃんがぜんぜんおきないんですもん」

ママはおきれた口調で私にいった。

「朝ごはんできてますよ」

「食べてる余裕ないよ」

私はとつさに、テーブルの上においてあった食パンをくわえて走っていった。

私の通う学校は、光坂高校のように坂があった。

私は、ここでパパとママが出会ったんだなあ、と思いつつ坂道を歩き出した。

すると私の前に同じ制服の男の子が歩いてきた。

その男の子は、私の隣の席の秋元 零次だった。

私は後ろから肩をたたいて

「おっはよ！秋元君。きみ、いつも遅刻してるのかい？」

「うっせーな。なれなれしいんだよ」

私は少し怒った。

「そういういかたないんじゃない。女の子にたいして失礼じゃない」

「はあ？俺に説教してる暇があったら学校はやくいったら？もう授業始まつてるけど」

私は時計をみてあわてふためいた。

「やっぱ。あんたのせいで完璧遅刻じゃないの」

私はそういい、走り出した。

最悪な出会い（後書き）

たぶん今後、朋也と渚はあまりでないかもしれませんがご了承ください。
さい。

いちおう汐メインで書いてるので。

今日と明日(前書き)

特にはありません

今日という日

完全に遅刻だった。

先生には一度もしかられたことのない私が初めてしかられた。成績の単位も下がりとても落ち込みモードだった。

「今日はどうしたの？ 汐ちゃん」

「うん。いつもだったら私たちと一緒にケーキ屋さんのまえで待ち合わせなのに」

「ごめん、由紀ちゃん。美鳩ちゃん。ホント今日は最悪」

わたしはそういい、秋元をみた。

放課後

「ねえ二人とも部活はやらないの？」

「私は合唱部にしようかなとおもってるよ。汐ちゃんは？」

「私は演劇にしようと思ってる。だってパパもママも高校生のとき演劇部だったんだって。だから私も演劇にしようとおもってる」

私はほこらしげにいった。

その後二人と別れ家へと帰っていった。

「ただいま！ママ」

「おお、汐おかえり」

家にはパパがいた。

「ただいま。あれ？ママは？」

「買い物だよ、もうすぐ帰ってくるからおもつから着替えてなさい」

「はい」

と、私は返事をし自分の部屋にいった。

数時間後ママが帰ってきて夕食を三人で食べた。そして私は秋元のはなしをした。

「へへ俺みたいなやつもいたもんだな。一回あってみたいよ」

「ほんと、昔の朋也君にそっくり」
二人ともニコニコしてはなした。

はなしているとき、一本の電話がかかってきた。

「もしもし、早苗ですけど」

それは早苗さんからの電話だった。

「どうしたんですか早苗さん、さんなに慌てて。オッサンがらみですか」

「そうなんです、あきよさんが交通事故にあってしまっていていま病院にはこばれたところなんです」

「ええ！ほんとですか。早苗さん。僕もいますぐ病院にいきましょうか」

「いえ、でも東京からじゃあちよつとご迷惑になるかと思いますので状態がわかり次第連絡します」

そして電話が切れた

今日という日（後書き）

あのくすいませんが少しGW中は連載中止します。

少し用事がありまして、GW明けに連載を開催しますので少しの間連載中止にします

不良、秋元零次

：俺たちは早苗さんからの連絡を待っていた。オッサンが草野球の試合中ボールを拾いに道路に出たところにダンパーにはねられた、という。それはとても不運な事故であった。

俺たち3人はだまりこんだまま、時間が過ぎていった。

すると、一本の電話がかかってきた。それは早苗さんからであった。

「もしもし、早苗ですけども」

「ああ、早苗さん！オッサンは無事だったんですか！」

俺は必死になっていった。

「おい！小僧。無事にきまつてんだろーが。この俺が車にひかれたごときで死ぬわけないだろうが。それともなにか？俺が死んじゃったんじゃねーか。と心配したか」

「あつたりめーだろうが！一応義理の父親なんだぞ。でもよかったよ、無事で。オッサン」

「あゝすまなつかたな、心配かけちまつて。まゝあと1週間で退院できるから心配すんな」

そして電話が切れた。俺はほっとした。渚や汐にもそのことを伝えみんな、ほっとした。

そして次の日、汐は友達と学校に行き俺も会社にかけた。渚の笑顔に。

青柳坂高校

私はいつもの三人で学校にむかった。

すると、坂の上に秋元がいた。いつもだったら遅刻してくるのに今日はいつもどおり来ていた。そして秋元の隣に男の子が走ってきた。すると美鳩ちゃんが、

「あれって、うちの学校の有名な二人組みじゃない？」

「そうみたいです。いろいろとこの学校に伝説を残した二人組みですね」

「ねえ由紀ちゃん。伝説ってなにやったの？」

「まずひとつは、たった二人で40人ぐらいの他校の不良どもを5分でかたづけたり、ほかにはお金をかつ上げられている子をたすけたり」

「たすけるってどういうこと？お金をその子にあげちゃうの？」

「ちがう、そのかつあげた子を3ヶ月は再起不能にさせちゃったりとかね」

私は少し感心した。よく聞いてみればいいことをしているのだからそれに二人ともルックスも、まあまあそこそこいいし。ってルックスは関係ないじゃん。と自分につっ込んでいた。

放課後、

由紀ちゃんも美鳩ちゃんも部活で一緒にはかえらなかつた。演劇部は顧問の先生が熱をだしてしまつてすこしの間休部になつたのだ。

そして一人で歩いていると、秋元にでくわした。

「ああおまえか…なんのようだ」

「別にようはないけど。ただ歩いていたらたまたまでくわしただけ」

「そうか」

といい、秋元は歩いた。

数分後、
「なんでついてくんだよ！ストーカーかてめえは」

「しょうがないでしょ家が同じ方向なんだから」

「おまえと近所？笑わせるな。俺はただ蔵本の家に行くだけだ」

「蔵本って不良二人組みのもう一人？」

「それがなんだ」

「いやー別に」

私は少しむっとした。

「なんで家に帰らないのよ」

「お前には関係ない」

といいきり、二つの分かれ道で秋元と別れた。

たしかパパも良平おじさんの家にたびたび行ってたという話を聞いたことがあり、やっぱり高校生のパパにそっくりとおもいつつ家へと帰った。

不良、秋元零次（後書き）

GWやすませてもらってすいませんでしたこれから再復帰したいとおもいますので応援のほどよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7481g/>

CLANNAD 東京編～

2010年10月10日17時56分発行